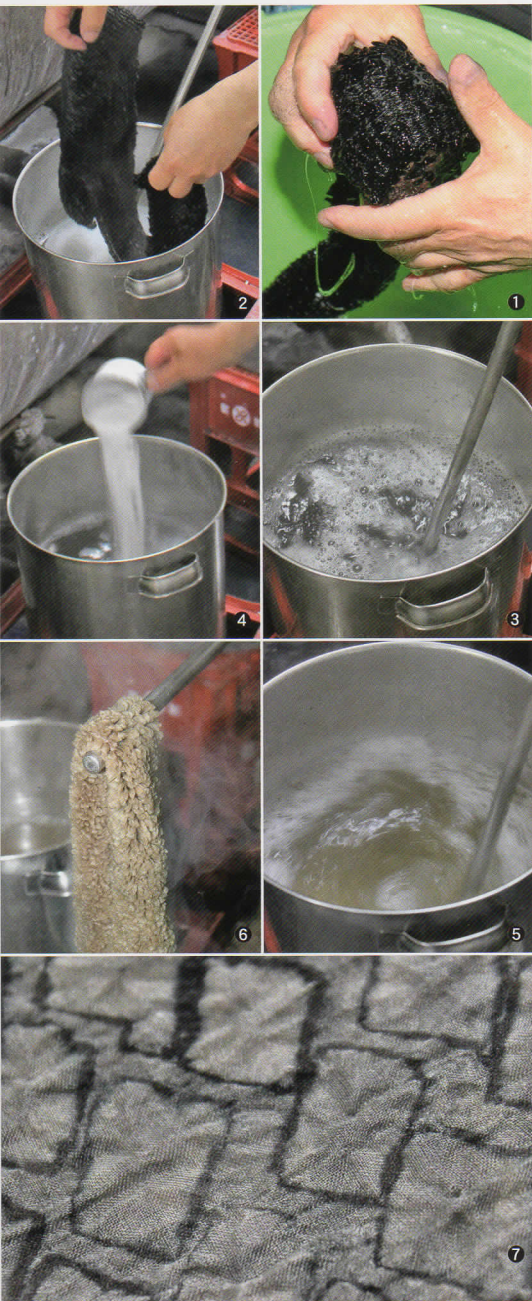


## 世界視野でこれからも

荒川さんの努力や工夫もあって試作品が出来上がると、竹田さんはミラノへ飛んだ。イメージしていた以上に面白い布になった。幸いシルクオーガンジーはとも軽い。しかし気持ちは少々重い。どこへどう提案したらいいのか……、作るほうも試行錯誤なら、売るほうも試行錯誤だ。なんせ前例はない。何軒目かに訪ねた「エトロ」が反応した。

「エトロは結局この布をミラノコレクションに出していましたね。ブラウスとかスカートとして活用してくれるようです。逆輸入じゃないけど、一年中着られるのももちろん洋服でもいいですけど、きものの羽織やコートにしてみましたら夏は涼しいし、冬はシルクなので当然保温性が高い。着ているきものが透けて見えるのがおしゃれじゃないですか！」と夢が膨らむ。試作品として仕立ててみたら案外面白い。何よりも、まだほとんど誰も着て



①絞りを終えて久野さんのところへ運ばれてきた生地。なんだか別の生き物のようでもある。②丁寧に少し粘りけのある特殊な液体に浸しながら巻いていき軽く絞る。③熱いお湯の中にそっと浸してかき混ぜる。④抜染材を投入。普通は正確に測るが、久野さんはほぼ目分量で完璧な量を入れる。⑤液は黒くなり、そしてあっという間に透明になっていく。⑥真っ黒だった布はベージュに。⑦解いてみると糸が巻かれていたところだけに元の色が残っている。染める、絞る、抜染する、また染めるの繰り返しでミラノの女性たちをも魅了した美しい布が生まれる。

いないところが楽しみだ。

染めは三宅一生やコシノヒロコ、ニコル等のテキスタイルや舞台衣装、インテリアまで幅広く手がける染織家の久野剛資さん（「久野染工場」代表）が引き受けた。竹田さんとはもちろん旧知の仲。竹田さんの数々のチャレンジをこれまで幾度も染め上げてきた職人でありアーティストだ。

「便利なのもいいと思います。普通の生地には絞りを施すのではちょっと平凡なものになるかもしれないけれど、地風を変えることでまったく違う世界観が生まれる。そこがすごく面白いですね」と竹田さん。シルクオーガンジーの可能性にも、そして次なるチャレンジにもエネルギーは尽きません。ミラノコレクションを経て次はこの布がどこへ行くのか。次なるチャレンジは？ そんなことを思いながら雨上がりの夕暮れ時、古戦場や浮世絵の世界とミラノの街並みを代わる代わる思い浮かべながら有松を後にした。



弊誌連載でおなじみの「和装美」の林良江さんがコートを着用。あまりの軽さや着心地の良さにビックリ。小さくなってシワにならないのでバッグの中に入れても便利！